

[19]韓国研究センター年報

<https://hdl.handle.net/2324/2544137>

出版情報：韓国研究センター年報. 19, 2019-03-29. Research Center for Korean Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

挨拶



深川 博史（九州大学韓国研究センター長）

韓国研究センター長の深川博史です。センター年報19号の刊行にあたり、関係者の皆様にご挨拶申し上げます。

本センターは1999年に、日本の国公立大学として初めて、韓国に特化した研究機関として創設されました。創設から19年間には紆余曲折がありました。創設当初は、韓国政府から5年間の支援を受けて、研究活動は活発でしたが、支援終了後は運営資金の確保が課題となりました。学部・研究院のような大組織とは異なり、小規模のセンターは基盤が弱く、文科系の研究センターでは資金の確保には限界があります。方向性を模索するなか、やがて本センターは、文部科学省の支援を受け、日本と韓国の国際共同教育事業を担うようになりました。

国際共同教育事業は2011年に、福岡と釜山を行き来する「日韓海峡圏カレッジ」として始まり、3年を経て、2014年には日米韓の「アジア太平洋カレッジ」へと発展しました。同カレッジでは、福岡、ソウル、釜山の各キャンパスでの英語授業に加え、日米韓の学生がハワイ州立大学に集まって協働学習を行っています。本事業の特徴は、海外派遣を行う前の数か月間、各国間の共通課題の事前学習を入念に行うことです。事前学習により、本番の協働学習の成果をあげることで、単位認定可能なプログラムとなっています。参加した学生たちは海外の学生との協働学習を通して自信をつけ、長期交換留学などの次のステップへ進むようになりました。

このような成果を生んできたカレッジ事業ですが、本年には、文部科学省の支援終了の時期を迎え、再び、本センターは、組織運営の見直しを迫られています。

今後の本センターの方向は、研究の結節点としての機能を充実させていくことにあると考えています。小規模のセンターでは、単独での研究成果には限界があります。九州大学から日本、日本から世界へと、韓国研究の連携を深め、本センターが、様々な研究活動をコーディネートする機能の充実を目指して参ります。

手始めに、本年3月には、世界韓国研究コンソーシアム（Worldwide Consortium of Korean Studies Centers）加盟校の、若手研究会を主催しました。同コンソーシアムは、九州大学が世界に呼びかけ、ハーバード大学、ロンドン大学、カリフォルニア大学、オーストラリア国立大学などを加盟校として発足したもので、日本の加盟校は九州大学だけです。同コンソーシアムは、加盟校約10校が持ち回りで、世界の加盟校の韓国系研究センター長会議や、若手研究者の報告会を毎年、開催しています。今年は、本センターの創設20周年を記念して、ハーバード大学、ベルリン自由大学、ソウル大学などから、大学院生を九州大学に招待し、コンソーシアム若手研究会を開催しました。本センターは、研究発表の場を設けることで、世界の次世代研究者の育成に貢献しています。このような結節点としての機能が、今後の活動領域の一つになると思われます。これからも、小回りの利く小規模センターのアドバンテージを活かして、結節点としての機能の充実に取り組んで参ります。

引き続きまして、皆様のご支援を、よろしくお願い申し上げます。